

研究に関する情報公開文書

下記研究は、名古屋市総合リハビリテーション事業団附属病院倫理審査委員会の承諾を得て、研究責任者の下で行われています。すでに実施済みの下肢 repetitive Transcranial Magnetic Stimulation(以下、rTMS)後に関わる計測データを下に行われるため、対象となる患者さんに新たなご負担はおかけいたしません。また、研究結果は学会や学術雑誌などに発表されることがありますが、患者さんのプライバシーは十分に尊重され、個人情報（お名前など）が外部に公表されることはありません。ご自身の検査情報が、この研究に使用されることに同意されない方は、下記の連絡先までご連絡いただければ、研究対象から除外させていただきます。研究へのご協力についてはいつでも拒否または撤回をすることができます。なお、同意されない場合でも、診療上不利益を被ることはありません。また、本研究に関して詳しい説明を希望される場合も、下記の連絡先にお問い合わせいただきますようお願い致します。

研究課題

下肢 rTMS 後の集中的な理学療法が歩行能力に及ぼす影響とその経時的変化

研究責任者

名古屋市総合リハビリテーションセンター附属病院 第1リハビリテーション部 理学療法科
理学療法士 生田旭洋

研究組織

名古屋市総合リハビリテーションセンター附属病院 第1リハビリテーション部 理学療法科
理学療法士 石黒 正樹、田島 資子、岡元 信弥、佐藤 晃、宇井 瑞希、識名 満希子、清水
隆司、早野 充浩、中川 有花、松尾 麻友、野末 茉莉奈、鈴木 美紗、若泉 賢
也、赤羽 洋子、辻 朋浩

名古屋市総合リハビリテーションセンター附属病院

医師 第1脳神経内科部長 稲垣 亜紀
第2脳神経内科部長 堀本 佳彦
脳神経内科 佐藤 千香子
第1リハビリテーション部長 小川 鉄男

研究期間

令和2年11月27日～令和7年3月31日（予定）

対象者

対象は、平成28年1月1日～令和3年3月31日に当院で下肢 rTMS と集中的な理学療法を行った患者さんです。年齢は30～80歳代で、10mを軽介助レベル以上で歩行可能、かつ下記の評価項目を測定可能な患者さんです。

利用する情報

基本情報（年齢、性別、疾患名、発症後期間、身長、体重）、身体機能、筋緊張、体幹機能、歩行能力（動画撮影を含む）、有害事象。

情報の管理

当事業団の個人情報の保護に関する規定に従って管理を行います。

「事業団個人情報の保護に関する規定」

http://www.nagoya-rehab.or.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/000/842/20180116-110553-8806.pdf

研究目的

脳卒中片麻痺患者において、体幹や下肢の機能低下や歩行障害は、その対象者の日常生活動作や生活の質と密接に関係しており、失われた身体機能の再建が重要である。我々は下肢 rTMS 後の集中的な理学療法が、脳卒中後の下肢、体幹機能低下を認める患者にも適応できる可能性があると考えた。その治療効果を検証し、今後の下肢 rTMS 後の治療的介入方法確立の一助としたいと考える。本研究の目的は、下肢 rTMS 後の集中的な理学療法が歩行能力に対する影響を明らかにすることである。

研究方法

1. データの取得方法

対象者の下記データを電子カルテより取得する。

①基本情報：年齢、性別、疾患名、発症後期間、身長、体重

②身体機能検査 ③筋緊張検査 ④体幹機能検査

⑤歩行能力・歩容評価（動画撮影）

*②③④⑤は、rTMS 前、rTMS 後、rTMS 1 ヶ月後、rTMS 3 ヶ月後のデータを取得する。

2. 分析方法

上記項目について、rTMS 前後の経時的変化を比較する。また、体幹機能と歩行能力の関連性について検討する

本研究に関する連絡先

名古屋市総合リハビリテーションセンター附属病院 第1リハビリテーション部 理学療法科

生田 旭洋

愛知県名古屋市瑞穂区弥富町密柑山 1-2

TEL : 052-835-3811 (内線 762 理学療法科)